

ワークライフバランス(WLB): コロナ禍で熱くなる私

幸野 健

会津中央病院皮膚科特任部長

2020年正月早々、服部瑛先生(高崎市)から別刷りを頂戴した。題して『続日本紀』における疫病について¹⁾。奈良時代における上下をあげての感染症との苦闘の記録である(2019年10月印刷)。当時はダイヤモンド・プリンセス号来航前で、筆者は対岸の火事よろしく楽観視しており、その後の展開と混乱は予想していなかった。後に「服部先生の犬予言だ!」と驚くと同時に、多忙な診療の間に、よくこれだけ詳細に医学史研究をされたものだと感嘆した。

考えてみれば、西山茂夫先生と蝶研究、斉藤隆三先生と俳句、若手では戸倉新樹先生とオーケストラ等、皮膚科の達人たちは複芸・多芸をこなされる。この方々のワーク(W)とライフ(L)はどうなっているのか?

本リレーエッセイで、スーパーハードワーカーの岸本和裕先生(竹田綜合病院)は、診療を「時間軸」対「生産性」の2項対立で考察されている²⁾。要は「(時間)量」ではなく、「生産性=質」を考慮した行動が重要ということだろう。これはワーク(W)においても、それ以外のライフ(L)においても当てはまる。

会津の岸本先生といえば日本酒道の達人でもあり連想したのだが、人気ある日本酒に「而今(じこん。僧は「にこん」と読む)」というものがある。この言葉の出典である道元の時間論(正法眼蔵・有時)を自己流に解釈してみた。「客観的・物理的時間」は流れる。だが、懸命に生きている「主観的時間」は流れるとは意識されず、「塊」として任意に移動(経歴「きょうりゃく」)するだけだ(後で流れ去ったように認識される)。この「塊」をいかに熱い硬いものにするかが問題だと。



診療時間もそれ以外の時間も、すでに老境の私の身に合った形で、「熱い硬い塊」にしよう。コロナ禍のもと、皮膚科の患者さんと、できるだけコロナ対策に役立つような話をしようと思い立った。消毒薬、マスク皮膚炎、コロナと口腔ケア・鼻うがいなどなど。そして不安な面持ちの患者さんたちを和ませられるような世間話をしよう。そうすると、診療時間以外も結構忙しくなった。経済貢献と考えて家内と行く「夕飲み」のバー・居酒屋でも、皆さんのコロナに対する意見、印象、感覚をできるだけ吸い上げ共有・共感に努めている。

帰宅すると、昔とった杵柄「EBM」で、「無症状者にPCR検査すると擬陽性が多数出る?」「コロナのPCRの感度も特異度も根拠があいまい?」などと勉強しまくっている。とくに神戸大・岩田健太郎先生の著書³⁾や筆者と同年配の神経内科医・池田正行先生のサイト⁴⁾はたいへん参考になる⁴⁾。もうワークもライフもそのバランスに気がつかないくらい熱くなっている今日このごろだ(よい意味でのWLB崩壊)。でも年齢相応、体温低めで、喫煙者ゆえ足も冷え性だが。

〈文 献〉

- 1) 服部 瑛：歴研ブックレット『在野史論第16集』，歴研，東京，2019
- 2) 岸本和裕：皮膚病診療 42：910，2020
- 3) 岩田健太郎：僕が「PCR」原理主義に反対する理由，集英社，東京，2020
- 4) 池田正行：新コロバブル物語
<https://square.umin.ac.jp/massie-tmd/akitacovid19dema.html>